



平成 28 年 10 月 1 日 発行 第 20 号

目 次

巻頭言

20 号発刊を迎えて

今井 眞正 …… 1

陶芸家のひとりごと

15 年前と今

林 侑子 …… 2

陶芸道中いざ凝り気

粘土に癒されて

稲垣 薫 …… 4

私の作品自慢

焼きは一生 (その 2)

布目 温 …… 6

陶芸技術ノート

上絵付けの方法

井上 雅裕 …… 9

展覧会見聞録

あの時みんな熱かった！

アンフォルメルと日本の美術

片岡 俊彦 …… 10

活動報告

…… 15

会員便り

…… 16

編集後記

…… 17

付録 会報 投稿のしおり

…… 18

編集委員会

委員長 今井 眞正

委員 片岡 俊彦 増田淳三 稲垣 薫

巻頭言

20 号発刊を迎えて

会長 今井 眞正

やきもの倶楽部発足以来、機関誌を「炎（ほむら）」と命名し、変てこな題字を書かせていただいたのも私です。発行以来、会員みなさまに興味を持ってもらえるもの、しっかり最後まで読んで頂けるものを目標にコンテンツを作っていました。

何とか 20 号までは、最初に考えた内容で発行させてもらっておりました。もしかすると、そろそろ内容についても、考えるべき時期かもしれません。“陶藝家のひとりごと”なども同じ方に何回もご登場いただき、少し苦しい状況であります。

問題なのは、作家の方に原稿をお願いするにあたり、原稿料をお支払いせず、関係者のよしみだということで、ほぼ人間関係のみにてお願いして参りました。有益な文章を書いていただくためには、そろそろ原稿料も用意して、幅広い方々をお願いしたほうが良いのかもしれません。また何かの機会に、皆さんのご意見も頂戴できればありがたいと思っております。

会員みなさまに執筆いただく“陶芸道中いざ凝り気”や“私の作品自慢”は、私もいつも興味深く読ませていただいております。まだまだ会員の皆様がいらっしゃいますので、これは思いつくままにいろんなことをお話いただければありがたいと存じます。

“陶芸技術ノート”はもっと突っ込んで書いていく必要があるかもしれません。これも興味がある技術や、材料について皆様のご意見を聞きながら、有益な内容にしていきたいと思っております。ご意見等ご要望をお寄せいただければありがたいと存じます。

さて、このたび第 4 回の作品展の時期が近づいて参りました。やきものを創っておられる方は、是非ともご出品頂き、作品を肴にいろいろな話ができれば良いと考えております。私も皆さんの新

しい作品を拝見するのを楽しみにしております。

かねてより進めておりました当倶楽部のホームページですが、片岡さんの一からのご努力により、形になって参りました。近いうちにアップすることになると思います。この内容につきましても、編集委員で議論を進めて参りましたが、立ち上がりましたら、皆さんのご意見を取り入れながら、より良いホームページにしてゆきたいと思っております。こちら併せて皆さんのご協力をお願い申し上げます。

陶芸家のひとりごと

15 年前と今

陶芸家（紅村窯） 林 侑子

私がやきものの世界に入ると決めてちょうど 15 年が経とうとしています。曾祖父・祖父・父と継いできたやきものの歴史、15 年前は今思うとまだよく理解してはなかったですが、どこかでやらなければならない大切な事のように思っていました。きっかけは父の「やってみひんか」の一言でした。今でもその時の事をはっきり覚えていますが、「断れへんな…」というのが正直な感想でした。一人っ子ですからね。陶工高等技術専門校に入校しましたが、あまり意欲的でなかった私がまず戦ったのは同期の仲間や課題ではなく、持病の喘息でした。アパレル関係の仕事をしていたので土埃の舞う環境に身を置いたことなどなく、とにかく大量の薬と息をすることに苦労し、土もみの合格をもらうより苦しかったのをよく覚えています。そんな毎日にも慣れ、次第に喘息は出なくなり、成型科の 30 人が切磋琢磨して過ごす時間の楽しさと面白さに、意欲的でなかった自分は消え、やきものに向かう気持ちが深く強いものへと変わっていきました。同校には 2 年通い、釉薬の勉強も 1 年行ったのち、既に 65 歳だった父に少しでもたくさん教わりたくて家へ戻りました。

はじめに「この世界に入ると決めて 15 年が…」と書きましたが、紅村窯の仕事も、林侑子としての仕事も、色々なところでさせていただいている様々なお手伝いも、しっかりできるようになったのは実は三年前からなのです。

それまでは妊娠・出産・子育てに追われ、紅村の仕事を手伝う事もままならない時期が何年もありました。今振り返ると必死な毎日の中で独立したり、展示会に参加したりしている同期の姿を目にする度に何もできてない自分と比べ、一人で焦っていたように思います。

そして三年前、上の子が小学生になったのをきっかけに、自身の仕事や子供の陶芸体験イベントの開催などいろんな活動をスタートしました。しかし、ゆっくりまわし出したはずが、一年も経たないうちに坂道を転がるようなスピードになり、たくさんの歯車が色んな方向で繋がり、今、同時にまわっています。ホイールを走るハムスターのように楽しみながら、たまには降りて小休止を取りながら走り続けています。



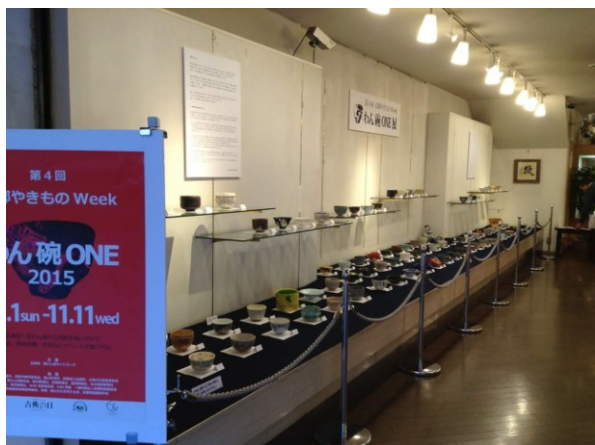
第 4 回京都やきもの WEEK わん碗 ONE

そんな中で私にたくさんの経験をさせてくれて成長させてもらっているのが『京都やきもの WEEK わん碗 ONE』というイベントです。今年で第 5 回を迎える『わん碗 ONE』ですが、11 月 1 日～11 月 11 日開催のこのやきものイベントに出品者としてだけでなく、運営として関わらせてもらって約三年になりました。私にとって『わん碗 ONE』は一年に一度めぐってくるガイド&答え付きの参考書のように、つくる以外の事を本当

にたくさん教わっています。今の私にできるところは、解きすすめ、答え合わせをし、まだまだたくさんあるわからない所は周りにいて下さる方々にアドバイスをもらいながら解いていく、まさにぶ厚い参考書ですね。この参考書のおかげで多くの経験と勉強をさせてもらおうと同時に、たくさんのご縁をいただいております。いろんな方々とお会いする機会に恵まれ、私一人ではお話しする機会や出会う機会すらもなかったかもしれない、たくさんの方々とのご縁は私にとって一番の報酬です。このイベントでいただいているご縁を色々な形で繋いでいくことが大切だと、人と人との繋がりを大事にしています。

ご縁をつなぐ方法も今は名刺交換よりも SNS、これが一番有効だとも身をもって教わりました。「フェイスブックやったはりますか？」最近名刺交換後、合言葉のように聞かれます。情報発信、これも大きなイベントだからこそ、中にある細かいイベントを知っていただくために、まめに行っていますので、SNS でどう見えるのか、どう伝えるのかも今の私のセルフプロデュースにたくさん活かされています。

今年もまた 11 月に向けて慌ただしく動き出しました。京都・やきもの倶楽部の会員様にも多数ご協力いただいているかと思えます。特に、昨年から企画開催いたしましたメイン展示『わん碗 ONE 展』は、京都府下から 136 名の方々にご出品いただきました。



メイン展示 わん碗 ONE 展

短期間で開催を決め、少人数で内容を詰めたこともあり、ご連絡が行き届かないことも考えて、

会員のお知り合いの方を中心に声掛けをさせていただいての開催となりました。当初はわん碗 ONE にちなんで 111 碗を目指しておりましたが、嬉しいことにそれを遥かに超える方々に御参加いただき、盛会裡に終えることができました。様々な形で現在の京都のやきものを支えておられる皆様にご協力いただくことによって開催することができたと感謝しております。展示会場で作品を見てみると、京都のやきものの幅の広さと奥の深さ、脈々と伝統を引き継ぎ、繋ぎ、紡いできた文化を感じられる素晴らしい展覧会となりました。今年も是非ご協力いただけましたら幸いです。



わん碗 ONE パンフレット画像

まだまだ未熟なわたしですが、周りの方々の熱い思いを近くで聞き、尽力されている姿をみると、子供たちにやきものを伝えること、そして京都のやきもの文化に尽力することが私の使命だと感じております。

やきもの屋に生まれ育ち、そして自身もこの世界に入って約 15 年、伝統を継ぎ、ご縁を繋ぎ、そして自分らしく紡いでいけるよう精進して参ります。

陶芸道中いざ凝り気

粘土に癒されて

会員 稲垣 薫

陶芸は大学時代に少し勉強し、もっとやりたいなあと思いながらも離れてしまいましたが、また陶芸を始めたいという思いはずっと持っていました。ある時、職場で知り合った友人の紹介で伝統工芸の会員である山中辰次先生の工房に見学に行ったのがきっかけで、まずは山中先生が講師をされていた飛陶園という陶芸教室へ通い始めました。そこが2年ほどで閉まってからは、山中先生が自宅で開かれた陶芸教室に、創設時からの生徒として22年通っています。

教室は火曜日・土曜日の午前・午後・夜とあり、私は土曜日の夜の部です。土曜日の夜の部は仕事を持ちながらも陶芸をやりたい！という熱い思いの人達の集まりで、よくもこんなに個性的な人が集まったものだ！と感心するほどいろいろで、それぞれが「こういうものを作りたい！」という思いを持っていて、とても刺激されました。仕事で心身ともに疲弊していた私にとって、陶芸をすることもさることながら、教室の仲間と会えるというのが週の終わりの楽しみでした。それを頼りに1週間を乗り切っていたように思います。冗談で



この水連鉢はお気に入りです。私の名刺やいろいろの文書などに載せています。毎年夏になると水を張ってつる草や浮き球を浮かせて展示室の入り口に飾っています。

友人に「陶芸を習いに行く」ではなくて、「セラピーに行く」と言っていました。

最初は古伊万里など染付が好きで、染付ばかりやっていましたが、次はかき落とし、磁州窯にはまりました。その後は彫り、はりつけなどその時期その時期にマイブームがあり、天使ばかり作っていた時期もありました。今は口を変形させて動きを出す作品を作っています。

たくさん作った天使のうちの一体を、友人のお義母さんが突然亡くなり、残されたお義父さんがとても気落ちしているのを、それを慰めるために、花作りが好きだったお義母さんが残された庭に飾りたいと言われて、手に花を持っている天使をブ



彫りに結構時間がかかりました。



左下の三人の祈る人たちは、陶芸教室に行った日がクリスマスだった時があり、クリスマスらしいものを作りたくて作りました。

レゼントしました。それをお義父さんがとても喜んで下さり、また、あまり顔をしっかりと作っていないので、見る人によっていろいろに見えるようで、お義母さんの友人は「〇〇さんにそっくりだ」と涙されたり、お義父さんは庭なので雨に濡れてはかわいそうだと、祠のようなものを作って毎日手を合わせて下さっているそうです。私の拙い作品にそこまでして下さるなんて作者冥利につきる、なんてこともありました。

陶芸教室では、次々と先生の所属されている伝統工芸展の近畿展を目指して大きな作品を作って入選されていく中、私はどうも大きなものを作るために技術を高めるよりも、いろいろ浮かんでくるイメージを具現化する方に興味があり、常に「こういう事はできるのでしょうか？」と先生に無理難題を言っています。それを「無理です」と言わずに、おもしろがっていろいろ考えて技法を提示してくださる先生に感謝しています。でも頭の中でのイメージではとてもいい感じなのに、焼きあがってみると「なあ〜んだ」とがっかりすることが多いです。

大きなものが作れない私は公募展にあまり縁がないのですが、24 cm 立方以内という笠間アマチュアコンクールとは相性がいいようで、2009 年ビール部門で、キリンビール賞をいただき、今後がんばるぞ！と思っていたら、コンクールが終わ



笠間ふるさと賞をいただいた作品で、タイトルは「ダンス」です。踊っているようなフォルムが出たくて、一作目はろくろ上でゆがめただけだったので、キレが悪く、改善してこれは三作目です。

ってしまい、がっかりしていました。でも 2014 年に復活して、2015 年には笠間ふるさと賞をいただきました。

はじめは陶芸教室に通って、仲間とおしゃべりをしながら作品づくりをしているだけで満足していたのですが、だんだんと欲が出てきて自宅に電動ろくろを買い、その 2、3 年後に電気窯を買い、2007 年には生家の鉄工所の工場を展示室と工房にリノベーションしました。工房を作ったすぐに甥のお嫁さんがホームページを作ってくれました。

(<http://nonkigama.web.fc2.com>)

でもその後彼らに子供が生まれて忙しくなり、アナログ人間の私は全然わからなくて更新できていません。唯一私が触れるブログの部分だけ月に 1、2 回くらい細々と書き込んでいる状態です。



もと工場なので外観が素っ気ないと言われて、手作りのタイルを張りました。

早期退職をしてから、その工房で陶芸に励んでいるかと言えば、親の介護などもあり、読書をしたり、冬は薪ストーブの火をぼんやり眺めていたり、暢嬉窯（のんきがま）と名づけたようにのんびりしています。

今後は手を出し始めた青磁の釉薬をもっと追求し、また陶芸をしていると仕事で硬直していた心に爽やかな風が吹き抜けるような気分だったのを思い出して、風を感じられる作品を自分の青磁で焼けたらいいなあと、かたつむりのようなスローな進み方ではありますが、止まることなく進んで行きたいと思っています。



口を動かすときに、思い切りが大切ですが、
つついっ触りすぎてしまいます。

私の作品自慢

焼は一生 (その2)

会員 布目 温

1. 瀬戸焼うなぎと鰻井

愛知県瀬戸の「せともの祭り」へ日帰りバスツアーで参加した時のことです。神奈川県を早朝に発ち、愛知県に入りましたが、東名高速は渋滞で午前中に着けそうになく、焦ってきました。「せともの祭り」でやきものを物色する外にしたいことがあったからです。

このツアーの本当の目的は、「瀬戸焼うなぎ」体験です。若い頃に瀬戸で仕事をしていた時、と言っても窯焚きではありませんが、仕事場に「長焼定食」（一本ごと焼いた蒲焼を細長い皿に乗せ、ご飯と汁がついた定食）を出前してもらった経験があります。瀬戸には陶器屋さんばかりでなく、うなぎ屋さんも多いのです。後に聞きましたが、瀬戸には窯焚き専門の人がおり、この人達のスタミナ源がうなぎだったのです。

有田陶器市へ行ったときも、お昼に鰻屋さんへ入ると、朝8時から営業と書かれていました。これは、朝窯焚きを終えた人達への伝統なのかもしれ

れません。唐津にも美味しい鰻屋さんがあります。陶器の産地とうなぎは深い関係があります。

瀬戸では店の入り口脇にある炉でうなぎを焼いており、中にはテーブルと椅子が無造作に置かれ、炉ではモクモクと黒煙が上がり、パタパタ団扇で煽る音がし、程よく焼けた蒲焼を店員が中へ持って入り、刻んで無造作に丼ご飯に載せ、テーブルへ運んでいます。焼けた蒲焼は、赤銅色で周りは焦げ目で一杯です。これを持ち帰りをするため、入口の脇で焼けるのを待っている人もいます。

この赤銅色で周りに焦げ目がついている蒲焼を、私は勝手に「瀬戸焼うなぎ」と呼んでいます。これは、鎌倉、平塚、小田原あたりにある、「湘南系」とは全く別モノです。岐阜生まれの祖母が「こんな美味しい蒲焼ははじめて」と言ったフワとした柔らかな「湘南系」も大好きですが、「瀬戸焼うなぎ」を一度体験すると、これは病みつきになります。



うなぎ店入口脇の炉で瀬戸焼うなぎを焼いている。パタパタと団扇で、モクモクと黒煙。

もし、どちらか1つ選べと強要されたら、野性味ある「瀬戸焼うなぎ」を選ぶでしょう。「湘南系」にある繊細さ・上品さはありませんが、エイヤと一気に引いた轆轤のような、力強さが味にもあります。井ご飯の上に無造作に乘せ、焦げ目も一杯ある鰻井は、フワとした柔らかな蒲焼を塗りの重にならべた鰻重とは、全く別モノです。

「瀬戸焼きうなぎ」が文字通りそうですが、やきものとうなぎが一緒に出てくるのが鰻井ですね。ぐらぐらと沸騰した鍋で井が熱せられ、炊きたてご飯に焼きたて蒲焼が載せられ出てくる、鰻井の蓋を開ける瞬間の期待と感動、至福のときですね。



蓋つき鰻井、名古屋東区豊年(鮮魚仕出し屋)が廃業される時に譲り受けた蓋付井)

瀬戸のやきもので外してならないのが、セト・ノベルティと呼ばれる輸出用の陶人形など置物類です。祖父は陶器会社に勤めていましたから、岐阜県多治見の工場へ連れられ、おみやげに貰ったセト・ノベルティを大事にして育ちました。私のやきものとの接点となりました。家にはレース人形が飾ってありました。

このレース人形は、陶人形の中でも、特に制作過程が多く、かつ繊細なやきものです。泥漿(スラリー状の陶土)を本物のレースに塗って焼くと、布のレースは燃えて陶製のレースが残るのです。

厚みは1mm位ですから、繊細なスカートの襷を陶で表現することができます。写真は、名古屋にあった松風陶器会社で作られた傘を持つ婦人のレース人形(筆者所有)です。微妙な傘の襷は思わず触りたくなります。

一昨年(2014年6月)瀬戸市にある愛知県陶磁器

美術館で「魅惑の陶製人形展」が開催され、鑑賞に行きました。懐かしいペコちゃんの陶人形やレース人形が展示され、半日ゆっくりと、セト・ノベルティを楽しみました。勿論帰りは瀬戸焼うなぎです。



レース人形(松風陶器会社製)



松風陶器会社のロゴ

2. 赤楽焼に入った蒲焼き

最近はお鰻井と注文しても、陶器の井ではなく塗り物のお椀が出てきてガッカリすることも多くなってきました。また陶器の井でも蓋なしで出されることも多くなってきました。

重たいモノ、こわれ易いモノは敬遠される、手間をかけない軽薄短小な世の中に向かっていきます。カウンター越しの棚に重箱が整然と並べてあるうなぎ屋さんには少し違和感を覚えます。

長崎県諫早に行って、陶器のお弁当箱のような



赤楽焼入りの蒲焼

入れ物に蒲焼が出てきたのには感激しました。赤楽焼き二重構造の陶器製で、下部にお湯が張って冷めないように工夫されています。これはうなぎとやきもの両方好きの方は、一生に一度は楽しんで欲しい鰻定食上です。

一生に一度は楽しんで欲しいと言えば、鰻蒸籠（セイロ）蒸しがあります。これも「瀬戸焼きうなぎ」同様に一度食すると嵌ってしまい、また食べたくくなります。

福岡県柳川が有名ですが、鰻蒸籠蒸し老舗の近くには蒲池（かまち）という所があり、ここには、「蒲池焼」と呼ばれるユニークなやきものがあります。一度は廃れましたが復活しておりまして、蒸籠蒸しと合わせて訪れました。

蒲池焼は低温度焼成の黒陶で、お茶の風炉に使われています。風炉は、機能としては炭を起こすときのガードの役割です。ここで見せてもらった「キセル窯」はユニークな形をしています。

黒陶とはいわゆる燠（いぶし）焼きで、熱い内に椿の葉っぱで磨くとあの艶のある黒色が出てくると教えてもらいました。瀬戸のみでなく、柳川

にもやきものとうなぎの接点があります。偶然に福岡県久留米で鰻屋さんを見付け、飛び込むと蒸籠蒸しがメニューにあり、注文しました。帰りがけに店のおかみさんに、「満足しました」と言うと、うちの蒸籠蒸し目当てで柳川から来るお客さんがいるよとのことでした。評判に頼らずに来る客、上には上がおられます。

黒陶と言えば、陶芸界の重鎮、八木一夫氏の黒陶が知られ、ユニークなやきもの「オブジェ焼き」が生まれました。八木一夫氏は、京都市立芸術大学で教鞭をとられましたが、この時キャンパスの移転問題があり、当時学長だった梅原猛氏は、八木一夫氏から「あちこち頼みにいくにも手ぶらではあきまへんわ。この手作りのものはお役に立ちませんか」と陶器を差し出され、「涙が出るほど嬉しかった。」と書かれています。（オブジェ焼き講談社文芸文庫）

梅原猛氏は父の同僚だったときにお昼をご一緒したのを覚えています。

3. トンネル窯から飛鉋

TOTO 小倉工場の一角にある歴史資料館を訪れたとき、衛生陶器を焼成している全長 115m もあるトンネル窯見学を、TOTO 茅ヶ崎工場の偉い方を通じて事前をお願いしておきましたところ、見学を終わった頃に歴史資料館前へリムジンでお迎えがあり、あっと驚きました。蛇足ですが TOTO は、以前は東洋陶器と名乗っていました。

もっと驚いたのは、相撲取り用の特注かと思える衛生陶器がトンネル窯に入り、出てくると普通人用になっていることでした。トンネル窯見学の後は、勿論、前に触れた小倉のうなぎ店に行き、



蒲池焼黒陶の風炉



小石原太田熊雄製陶所で見せてもらった飛鉋

蒲焼とその下に隠れている小鹿田（おんた）飛鉋（とびかんな）皿を楽しみました。飛鉋皿は、土づくり、轆轤整形、鉋による模様付け、化粧土かけ、素焼き、バリ取り、釉薬かけ、本焼きと多くの過程を経て蒲焼の下に存在しておりました。

4. 沈寿官陶苑と黒薩摩

NHK BS が始まって初期の頃、薩摩沈寿官陶苑登り窯にカメラを据え、窯焚の風景・過程が2日間に渡って放映されました。

余分な解説が少なく、真に贅沢な番組でした。これを見た後、薩摩焼の歴史を紐解いている内に、鹿児島県苗代川を訪れなくなり、鹿児島天文館にある鰻屋さんと白熊（練乳のかかった氷のデザート）を食する目的を兼ね、薩摩焼のふるさと苗代川を訪れました。

沈寿官陶苑へ行く前日に、苗代川にある桂木陶苑さんへ弁当を持参して訪問、黒薩摩の釉薬をかけてもらう予定の花入れを作陶、蓋付湯呑にも絵付けをさせて貰いました。

白薩摩や金襴手はお殿様御用達ですが、黒薩摩は民陶で酒器や醤油入れなど、なかなか味のある器が揃い、また、一概に黒薩摩と言っても黒色は窯元によってそれぞれ微妙に異なり色合いも様々です。

この話の続きは別の機会に譲るとして、うなぎとやきもの自慢は、ウェブ「布目温うなぎやきもの」にも載せています。

<http://www1.ttcn.ne.jp/nunome/index.html>

また、ここではお店の名前などは掲載しませんが、もしお知りになりたい方がおられましたら、以下へメールをお願いします。

a-nunome@mx6.ttcn.ne.jp

陶芸技術ノート

上絵付けの方法

（株）井上顔料 井上 雅裕

磁器に絵をつける方法として下絵付けと上絵付けがあります。

粘土や磁土を練って整形し素焼きしたあと、施釉する前に色や絵をつけることを下絵付けと言い、呉須などの顔料で絵付けをする方法染め付けとも言います。

これに対し、施釉して本焼をし、釉薬ののった表面に色や絵をつけることを上絵付けといいます。約 800℃ 前後で焼き付けたものです。手書きや転写紙を使って彩色をします。しかし、本焼きした釉薬の上に顔料があるため、酸、アルカリなどで、侵されたり、傷付き、剥がれたりすることもあります。

一方、釉薬そのものに着色してあるものは色釉と呼ばれ、この場合には上絵付けに比べて安定しています。

■ 上絵の具

上絵付けに用いる上絵の具には和絵の具（九谷などの透明感がある絵の具）と洋絵の具（不透明感）などがあります。以前の上絵の具には鉛が入っていましたが、近年、食器などに鉛の使用が禁止されてきたので、無鉛の上絵の具が一般的になってきています。

上絵の具は、焼成時の温度でも安定した顔料（着色剤）と、釉の上に、固定させるフラックス（熔剤、融剤）からできています。顔料となる着色材には、次の様な金属類があります。一部ですが、酸化コバルトは（青色、黒色、青色、緑色）、酸化マンガンは（紫色、青色、黒色）、酸化銅は（緑色、赤色 {辰砂}）、酸化鉄は（茶色、赤色、黒色、）等になります。

■ 上絵付け

本焼きをした作品の釉薬の上に絵付けをしますので、そのまま絵具で絵などを描くと、顔料が

作品に定着せずにはじいてしまいます。はじかないようにするために作品の前処理をする必要があります。一般的には膠液を筆や布に付けて作品の釉薬の表面を拭き、薄く膠液処理をします。この処理をすることにより、表面がざらついて、顔料がはじかなくなります。この膠液は作品を焼くことにより燃えてしまってなくなります。

次に絵具を擦るのに、ガラス板の上に上絵の具の顔料、接着剤、水を混ぜ合わせて角乳棒でよくすり合わせます。接着剤としては、ふのり、CMC、上絵用水性メジウムなどがあります。また、上絵の具、ふのり、水を混ぜ合わせた液体にニガリを少し入れると、筆はこびりが良くなったりします。

フラックスは低火度 800℃ 前後で溶ける熔剤・融剤で、あまり知られていないかもしれませんが、下絵の具にフラックスを混ぜ合わせると上絵の具として使えます。白玉は、溶剤、フリットで、唐の土は、鉛白（塩基性炭酸鉛）のことで、顔料が、同じでも、溶剤の種類によって、発色する色が微妙に、異なります。

展覧会見聞録

あの時みんな熱かった！

アンフォルメルと日本の美術

会員 片岡 俊彦

表題は本年 7 月 29 日から 9 月 11 日まで京都国立近代美術館で開催された展覧会のタイトルである。入場券には、さらに — “旋風” が覚醒させたもの — という副題がついており、非常に仰々しい案内となっている。この展覧会があると知ったのは、京都・やきもの倶楽部から送られてくる美術館の案内パンフレットからであった。“あの時” というのは 1950 年代と 1960 年代のことで、ちょうど私が少年期から青年期の頃である。

私の小学生の頃は、絵画の授業といえば大方水彩画で、風景や静物を鉛筆で形どりをし、それに絵の具で色を付けるというのが私のやり方であった。もっぱらオーソドックスな描き方を楽しんでいた。しかし、中学生になってから若い美術の先生に代わり、「色は見た色でなくてもいいですよ、感じた色を使っても構わないですよ」と教えられ、なるほどと思い、空を真っ赤にしたのを覚えている。私の通っていた学校は中高一貫校であったので、高校も美術の授業はその先生の担当となった。クラブは運動神経の鈍い私にとっては、体育系はダメで美術部を選び、その先生に指導を受けた。といっても指導というのは形だけで、何も教えない、何をやっても良いという“指導”であった。このことが、私の芸術観の基となった。その先生は独立美術協会だったと思うが、その団体に属しておられて、当時の流行となっていた前衛作品を制作されていた。美術部の部室はいつも襖 2 枚分もある大きなキャンバスがたくさん置いてあったのを覚えている。私のほうは、このような環境の中で具象画ではあるが、かなりデフォルメした油絵を描くようになっていた。特に、工事現場のぐちゃぐちゃした風景が好きだった。

1964 年、大学に入学してからも美術部に所属した。美術部の名称は“トラバイユ”で、仕事を意味するらしい。私が入部する数年前に先輩たちが作ったクラブである。この 4 年間で表題にある“あの時”に繋がっている。美術部の部室は、大学附属の研究所で使っていたのであろう牛小屋を改造したものであった。改造といっても掃除しただけで牛の居た囲いそのまま残っていた。授業が終わって、バイトのない日は必ずこの部室に立ち寄った。他に部員が居る日もあれば、居ない日もあった。いつ行ってもよいクラブで、自由であった。作品を作る環境としては最高だと思っている。作品はいつもベニヤ板 2 枚が標準の大きさだった。絵の具は当時開発され始めたアクリル塗料だった。

私の作品の模範となったのは、吉原治良をリーダーとする具体美術協会というグループだった。吉原は油問屋の社長であり、その持ち物であった土蔵を改良してグタイピナコテカというグループの展示場を大阪中之島の近くに造っていた。当時、大学の講堂がその近くにあったので、何回か見に

行き、中でも田中敦子の作品（後述）が気に入っていた。この作品は色彩豊かな円形とそれにまといつく細い線が特徴であった。現在、私が同心円を基調に陶芸の絵付けをしているのもこの影響を受けたものである。残念ながらこのグループは、1972年、中心となった吉原の死去とともに解散となった。

具体グループの作品は当時吉原が芦屋市に住んでいたために、芦屋市立美術博物館に多くの作品が所蔵されており、具体に関連する催しも開催されている。最近になって、私は3回ほど芦屋まで足を運んだ。

■ “没後 40 年 吉原治良”

2012 年 4 月 14 日～5 月 27 日

■ “戦後のボーダレス 前衛陶芸の貌”

2015 年 11 月 28 日～2016 年 2 月 7 日

■ “芦屋市立美術博物館コレクション展
具体美術協会 1950 年代 “

2016 年 4 月 16 日～6 月 19 日

このように、私の若かった時代、まさに“あの時はみんな熱かった”のである。

さて、ここから表題の展覧会の話にはいる。展覧会ではその時代をアンフォルメル時代と定義している。展覧会カタログにある平井章一氏の前書き“日本におけるアンフォルメルとその役割”によると、そもそもアンフォルメルという言葉はフランスのタピエという美術評論家が考えた独自の美的概念を表す造語であるとされている。以下、この解説にしたがって当時の美術界の状況について概観する。

第二次世界大戦が終結して間もない 1940 年代後半に欧米の美術界において、それまでに見られなかった新しい表現が次々と登場した。具体的には、作者自身による激しい行為や素材が持つ生々しい物質感の強調、単一的なモチーフの反復や集合、画面全体への展開、明確な輪郭を持たない形態や色面などを特徴とする絵画や彫刻であった。タピエはこれらの作品群について、これまでの美学によらない「別の美学」を構築する必要性を論じた。すなわち、あらゆる思想や形態の可能性をはらんだ混沌とした状態をアンフォルメルと定義したのであった。

この芸術論とその活動は日本にも伝わってき

た（1957 年、タピエの来日）のであるが、当時の日本の美術家や日本人全体が抱えていた戦後の“開放感”と結び付いて独自に解釈され、芸術運動として定着した。いわゆる前衛芸術である。すなわち、日本においては、タピエの言う概念としてのアンフォルメルではなく、新しい芸術運動となっていた。私自身もそれに感銘を受けた一人であった。

展覧会にはこの時代の約 100 点の作品が展示された。アンフォルメル旋風の前夜、1950 年から 65 年の間に生み出されたさまざまなジャンルの作品を、タピエ自らが認定した欧米の作品に見られる 4 つの様式的な特徴や特有のイメージで大別されている。

1. 身体・アクション・線の流動
2. 原始・生命・生態的イメージ
3. 反復・集合・覆われる画面
4. マチエール・物質

この中から私の気に入った作品だけを取り上げて並べる。

ミシェル・タピエとアンフォルメル

（タピエが選んだ欧米でのアンフォルメル作品）



ジョルジュ・マチュー 「無題」

1957 年 [36 歳] 132.0×162.5 cm

材質：油彩・キャンバス

一般財団法人草月会



サム・フランシス 「サーキュラーブルー」
1953年〔30歳〕 196.6×174.0 cm
材質：油彩・キャンバス
滋賀県立近代美術館



白髪 一雄 「天暗星青面獣」
1960年〔36歳〕 182.0×272.7 cm
材質：油彩・キャンバス
兵庫県立美術館

原始・生命・生態的イメージ

身体・アクション・線の流動



吉原 治良 「作品」
1960年〔55歳〕 116.7×91.0 cm
材質：油彩・キャンバス
京都国立近代美術館



岡本 太郎 「燃える人」
1955年〔44歳〕 212.5×308.5 cm
材質：油彩・キャンバス
東京国立近代美術館



勅使河原 蒼風 「樹獣」
1957年〔57歳〕 120.0×250.0×130.0 cm
材質：真鍮・木
一般財団法人草月会



田中 敦子 「作品 '63」
1963 年 [31 歳] 193.5×122.5 cm
材質：合成樹脂・エナメル・合板
京都国立近代美術館

反復・集合・覆われる画面

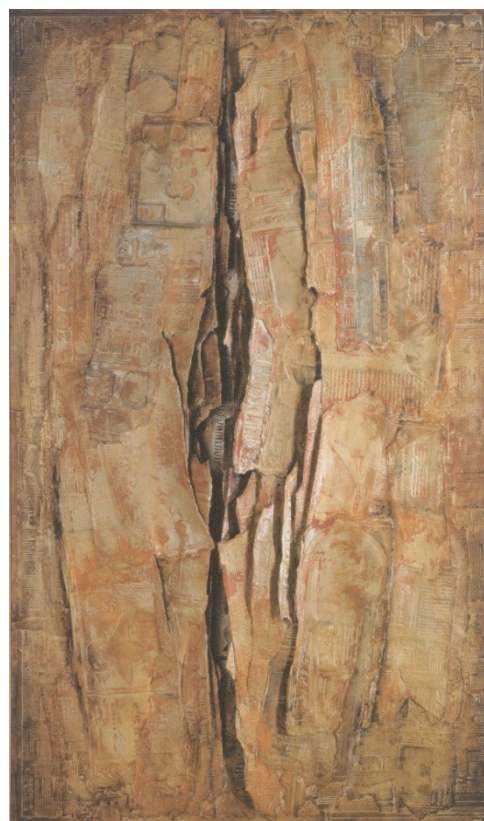


正延 正俊 「作品」
1964 年 [53 歳] 161.5×130.0 cm
材質：エナメル・キャンバス・板
京都国立近代美術館

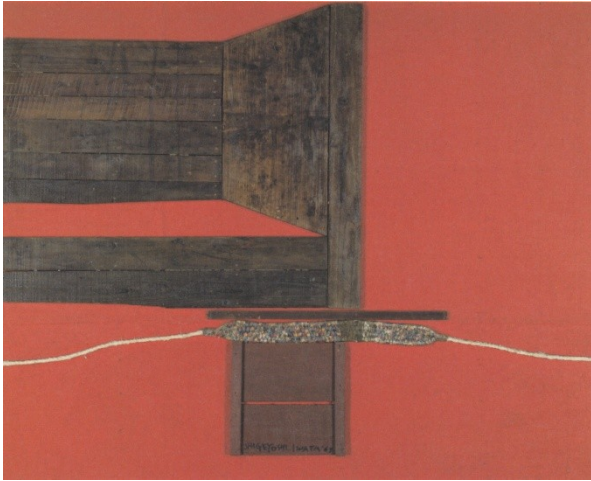


向井 修二 「作品」
1964 年 [24 歳] 184.0×184.0 cm
材質：油彩・ミクストメディア・板
兵庫県立美術館

マチエール・物質



野村 耕 「裂-1」
1964 年 [37 歳] 121.0×91.0 cm
材質：油彩・合成樹脂塗料・新聞紙型紙・板
京都国立近代美術館



岩田 重義 「WORK-139」
1963 年〔28 歳〕 130.0×160.0 cm
材質：油彩・綿布・木・キャンバス
京都国立近代美術館

この展覧会では、タピエの提唱するアンフォルメルという括りで展示されているが、第二次世界大戦後の当時の日本においては、すでに前衛芸術の芽は育ち始めていた。絵画では吉原治良の主宰する具体美術協会（1954 年）、生け花では勅使河原蒼風が初代家元である草月流（1927 年）、陶芸では宇野三吾を中心とする四耕会（1947 年）、八木一夫らの走泥社（1948 年）である。

1952 年、吉原らが発起人となり、現代美術懇談会（略称ゲンビ）が結成された。この会の趣旨は「新しい造形を志す人々が各所属団体を考えずに自由な個人の立場からお互いに忌憚なく語り合う会」であり、月一度の懇談会（研究会）を開く等、これをきっかけにして異なるジャンルのグループ間の交流が盛んに行われるようになって行った。このような状況の中で、アンフォルメルの概念が外国からもたらされ、前衛芸術が一気に盛り上がったのである。

私が陶芸を始めたのは今から十数年前のことであるが、最初は陶芸の基本的な技術を身につけることで精一杯であったし、作るものは茶碗、お皿、花瓶、壺など実用品だけだと思っていた。始めての公募展であった第 6 回陶芸アマコン大賞（2005 年）に壺と花瓶を出した。ただ、花瓶のほうは少し工夫をして側面に 4 本の腕をつけた。しかし、これが落選で、単なる壺のほうが入選した。やはり奇抜さをねらうのはダメなのかと思った。とこ

ろが、実際に展覧会に行ってみると、立方体の端が少しめくれ上がった箱を繋ぎ合わせた作品が創作部門の大賞をもらっていた。どこから見てもオブジェである。これなら、あの“熱かった”時代の感覚でやってみようと思決心した。

翌年のアマコンには少し歪んだ立方体の箱 2 つを回転させて繋いだオブジェ作品を出した。今度は、同じ創作部門で大賞を頂いた。何よりも自分の思いを込めて作った作品だったので、本当に感激した。

それに続いての感激は、もう一つあった。翌年の 2 月頃だと思うが、ちょうど、京都・やきもの倶楽部発足の準備として陶芸交流会がホテルグランヴィア京都で開催された時のことである。その日は「食と器について」をテーマとした座談会とそれに続いて懇親会が催された。その懇親会の席で、初めてお会いした林康夫先生にご自分の陶芸についての熱のこもったお話を聞くことができたのが二つ目の感激である。懇親会も興に入り、私の酔いもたけなわといった気分で、四耕会のこと、創作への情熱や官展への対抗心など、気概に燃えていた若い頃の話聞かせていただいた。まさに熱かったあの時代の真っ直中を生きてこられた先生のお話が私の陶芸に勇気を与えて下さったと心から感謝している。



林 康夫 「雲」
1948 年〔20 歳〕 33.7×33.0×27.5 cm
材質：陶
未生流中山文甫会

活動報告

特別講座「赤楽茶碗」後半の開催

開催日：平成 28 年 4 月 9 日

本講座の前半は、本年 2 月に清水焼の郷会館で楽茶碗の「成形」と「削り」が行われた。その後、形の出来上がった作品はすべて先生の工房まで移され、先生やお弟子さん達の手により「黄土塗り」、「乾燥」、「素焼き」、「ふ付け（炭化窯変）」までの工程がなされた。

この工程が終了した段階で、前半に参加した 35 名の内、希望者 18 名が先生の工房である“楽焼窯元「楽入」”に集まり、「施釉」と「焼成」に挑戦した。「施釉」では先生のユーモアを交えた説明を聞きながら、非常に粘り気のある釉薬を刷毛で素早く大胆に塗りつけていった。次の「焼成」では、900 度に熱せられ、真っ赤になった窯に火箸で掴んだ作品を入れ、10 分ほど置いてすぐに引き出し、冷め切らない内にそのまま水の中に入れる。この工程は、日頃経験したことのない参加者にとってはドキドキとともに感動であった。

こうして出来上がった作品はそれぞれ紙箱に納められ、立派な楽茶碗となった。二日に亘る楽焼体験は参加者全員にとってよい思い出となった。

楽焼作品図録の発行

今年度、総会の時期に合わせて実施した楽焼体験イベントは倶楽部として初めての経験であったが、参加者を倶楽部会員に限らず、一般の方々にも呼びかけることにした。そのために、「特別講座 楽茶碗を作ってみよう」のパンフレットを作り、全会員と理事の方々に倶楽部以外の方々への配布をお願いするとともに、新聞社にも掲載してもらうなど、広報に務めた。その結果、予定していた定員を超える 35 名の参加を得た。このような状況が判ってくる中で、恒例の作品展と同様に楽焼作品の図録を作ろうということが決まった。それを受けて楽焼体験行事と同時進行で編集作業を進め、完成に到った。また、図録の配布に関しては、この行事への参加、不参加を問わず、希望者に対しては実費で販売することとした。

図録「特別講座 楽茶碗を作ってみよう」

冊子 B5 版、16 ページ、中綴じカラー印刷

価格 700 円

- 内容
1. はじめに
 2. 特別講義楽焼について
吉村楽入
 3. 赤楽茶碗の制作
 4. 赤楽茶碗作品集



楽焼図録 表紙

会員便り

個展・グループ展・公募展

(平成 28 年 4 月 ～ 平成 28 年 9 月)

京都・やきもの倶楽部に所属されている方々の展覧会で、機関誌「倶楽部だより」に掲載されたものをまとめています。会員各位の活動状況をお知らせするために設けました。掲載希望の方は、どのような規模の展覧会でも結構ですので、ふるっとお申し込み下さい。用紙は、「倶楽部だより」に添付されている展覧会情報掲載申込書をご利用下さい。

平成 28 年

■ 5 月 3 日 ～ 5 月 6 日

第 22 回美濃茶盃展 (多治見展)

セラミックパーク MINO 国際会議場

(岐阜県 多治見市)

吉田 貢 (入選)

■ 5 月 10 日 ～ 5 月 15 日

第 55 回 日本現代工芸美術展

京都市美術館 2 階 (京都市)

森田 隆司

■ 5 月 10 日 ～ 5 月 16 日

第 45 回 日本伝統工芸近畿展 (大阪展)

大阪府咲州庁舎 2 階 咲州ホール (大阪市)

吉田 貢 (入選)

■ 5 月 11 日 ～ 5 月 23 日

第 38 回日本新工芸展

国立新美術館 (東京都 港区)

和田 真理子 (入選)

■ 5 月 14 日 ～ 5 月 18 日

宮崎まさのり 切り絵象嵌陶展

ギャラリー 象鯨 (京都市)

宮崎 正制

■ 5 月 18 日 ～ 5 月 23 日

第 45 回 日本伝統工芸近畿展 (京都展)

京都高島屋 7 階グランドホール (京都市)

吉田 貢 (入選)

■ 5 月 18 日 ～ 5 月 24 日

第 4 回 陶美展 日本陶芸美術協会主催

日本橋高島屋 6 階美術画廊 (東京都 中央区)

吉田 貢 (入選)

■ 5 月 18 日 ～ 5 月 24 日

第 22 回美濃茶盃展 (名古屋展)

JR 名古屋高島屋 10 階 美術画廊

(愛知県 名古屋市)

吉田 貢 (入選)

■ 6 月 14 日 ～ 6 月 19 日

第 63 回 象 (かたち) 同人展

京都府立文化芸術会館 1 F (京都市)

森田 隆司

■ 9 月 14 日 ～ 9 月 20 日

一継承と創造一 陶藝家今井政之三代展

あべのハルカス近鉄百貨店本店

11 階 美術画廊 (大阪市)

今井 真正

■ 9 月 14 日 ～ 9 月 25 日

第 52 回 神奈川県美術展

2 期 (工芸・書・写真)

神奈川県民ホール ギャラリー (横浜市)

安部 邦子

■ 9 月 27 日 ～ 10 月 5 日

一 燿く刻 (かがやくとき) 一 陶・今井真正展

福屋八丁堀本店 7 階美術画廊 (広島市)

今井 真正

■ 9 月 28 日 ～ 10 月 2 日

綾土塾 Ceramics Exhibition 4

神奈川県民ホール ギャラリー 第 1 展示室

(横浜市)

吉田 貢、寺西 健二

凡例

■ 開催期間

展覧会名

展覧会場 (開催地)

出品者名 (入選、入賞)

編集後記

“壺の口を閉じる” 走泥社の八木一夫が言った言葉で、ロクロの使える八木がロクロを離れて“オブジェ焼き”を始めた頃の一言です。器に蓋をすればその用途は無くなります。伝統的な陶芸作品としての碗、壺、花器、皿には用途があります。その用途を無くしてアートとしての価値だけを求めた作品が“オブジェ焼き”です。

私も自称オブジェ派なのですが、作品の全面を閉じるのに悪戦苦闘しています。まず、技術的なことでは、仕上げの際に中に手が入らず、作品の修正ができません。タタラ作りでは最後に閉じる面の形は成り行き次第で、思い通りの曲面を出すことができません。さらに、これは本質的なことですが、“これは壺、これは花器”と判る方が安心できるのではないかと、ついつい思ってしまう。

そこで、本倶楽部の作品展に出品された作品が、器か、オブジェかを調べてみました。どちらの分類にするかよく判らないものは、すべてオブジェに入れています。その結果、

器： 103 点 (73%)、

オブジェ： 39 点 (27%)

でした。やはり、圧倒的に器のほうが多いようです。皆さんはどちらでしょうか。会報 17 号に玄平さんが当倶楽部の作品展について書いておられた一言が思い出されます。

「回を重ねる毎に、やがて伝統工芸美を究める部門と創作アートとしてのやきもの部門が双頭を誇る展覧会として発展することを祈念してやみません。」

(編集委員 片岡俊彦)

[京都・やきもの倶楽部 ホームページトップに戻る](#)